

俳句に於ける寫生（II）

山口青邨

古いことをすこし書く――。

子規はまだ寫生論などもち出さない頃は月並の句を作つてゐた。

つき當るまで一息に燕かな 子規

蓮の葉にうまくのつたる蛙かな 同

こんな俳句である、つまらない、陳腐な句である。

ところが一度大悟して、寫生といふことに気がついてからは、手帳と鉛筆をもつて根岸の家から近い三河島あたりに出かけて行つては寫生の句を作つた。

稻刈りて水に飛びこむ蝨かな 子規

稻刈りてにぶくなりたる蝨かな 同

稻を刈つたあとの蝨といふものを子規はじつと眺め入つたのである。

「水に飛びこむ蝨」は机の上でも思ひつくかも知れないが、「にぶくなりたる蝨」はやつぱり寫生によつて気づくやうな材料である。勿論、田園に育つた人と都會で育つた人とで、それぞれの經驗に深浅があるから同じ頭の中で考へる――と言つても相違はあるが、とにかく内容的に言へばこの二つの句では同じ寫生でもそんな違ひがあるやうに思ふ。今では大したことではないが、子規の時代ではかうしたことが大變なことだったのである。

凧や燈爐にいもを焼く夜半 子規

子規の病床には石油ストーブがあつた、これを子規は燈爐と呼んでゐた（虚子の話）。そんなちっぽけな石油ストーブなどで、甘藷が焼けるわけではないが、食ひしんぼうの子規は無理を言つて――しかも凧の吹く夜半などに――うすつぺらにして焼けば焼けるなどと言つて、お母さんや、妹さんに焼かせたものと思はれる。

この句も子規の寫生眼が開けてからの作であつて、さういふ寫実の句で、想像の作ではない。

凧の吹く夜中にいもを焼くといふことは普通ならば無理なのであるが、病床にある子規のわがままが、そんなことを強引にさせたのである。それから燈爐といふ言葉を大膽に用ひたといふことも寫實といふことを尊重した結果である。かうした自分勝手な言葉を、人がわかつてくれるかどうかと凡人ならば迷ふところを、子規は奔放に使つてゐることも、革新者としての自信から來てゐるものと思はれる。

かういふことが従来の古くさいものを新鮮なものにひきもどしたのである。